



Title	現代ドイツのポピュラー・カルチャー：その諸相と批判をめぐって
Author(s)	横山, 香
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45765
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	横山 香
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 18962 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 6 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	現代ドイツのポピュラー・カルチャー—その諸相と批判をめぐって—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 金子 元臣 (副査) 教 授 木村 茂雄 助教授 山本 佳樹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文ではドイツのポピュラー・カルチャー、とくにテレビと女性の娯楽小説について、その諸相を考察し、それらをめぐる批判を検証している。ドイツにおいては今日でもポピュラー・カルチャーは、一方では価値の低い非道徳なものとして、一方では資本主義のイデオロギーを再生産する「文化産業」として、いまなお軽蔑と批判の対象にされ続けている。ポピュラー・カルチャーとは、人々の日常生活に深く埋め込まれている文化である。このポピュラー・カルチャー概念は、歴史学の民衆文化研究や民俗学、そしてカルチュラル・スタディーズにおいて使われている。

ポピュラー・カルチャー
民衆文化は、民衆/人々の日常に根づいたものでありながら、他の集団の文化を領有したり、それらと相互に交渉したりすることによって変容していくものと考えられている。そしてカルチュラル・スタディーズにおいてはとくに、ここでの権力作用が問題とされる。この概念を適用することで、ポピュラー・カルチャーは実体化や本質化を逃れることになり、上から押し付けられる文化/下からの抵抗の文化という二項対立的な見方も退けることができる。第1章ではドイツ語の文化概念の問題についても考えている。文化概念は、一方で教養や精神の高さという意味を、とくに対文明（対フランス）によって獲得していく。しかし一方では「素朴」で「純粹」な民俗文化 *Volkskultur* が知識人によって求められるようになる。しかしこの *Volkskultur* 概念は、後にナチズムのイデオロギーとなり、第二次世界大戦後はこのいずれの概念をも徹底的に批判する「文化産業論」によるブルジョワ文化・大衆文化批判が影響力を持つことになる。こういった文化概念が根強いドイツにおいて、ポピュラー・カルチャーはどの側からも受け入れられるものではなかったのである。

第2章ではドイツにおけるテレビの歴史と制度を「リアリティ/リアリズム」という概念を軸にしながら記述している。ドイツでは、テレビは最初から「表現」ではなく「再現」のメディアとして考えられていた。そして放映開始当初から激しい技術文明批判に、テレビという媒体自体がさらされていた。そのためテレビには文化的な意義が必要だった。それが「啓蒙の道具としてのテレビ」であり、この目的を支えてきたのがテレビのリアリズム的特性である。1960年代から70年代の社会批判が激しくなったときには、「リアリズムの要請」が叫ばれた。すなわち、テレビによって人々に現状を知らしめ、その批判のためにテレビが役立つべきだというものである。しかし実際のところ、一部の知識人が思うほど、成果は上がらなかった。むしろ過剰な演出をするアメリカ製の番組が人気を得るのである。80年代には次々とアメリカ製の番組が輸入され、それに倣ってドイツでもソープ・オペラや犯罪ものの番組などが

次々と作られることになる。しかしそれらの番組も派手な演出はほとんどなく、リアリズムの要請を引き継ぐものであった。それでもこれらは日常的だとして人気を得る。このアメリカとドイツの例は、何かを「リアル」と感じることは現実が再現されているというリアリズムによるものではないことを示している。これを文化研究者のイエン・アン Ien Ang は「デノテーション・レベル」と「コノテーション・レベル」のリアリズムの違いと考えた。テレビ番組がリアルであれ、リアルでないものであれ、どちらにしてもポピュラリティを得ることができるのは、それが「コノテーション・レベル」での読みに関わっているからなのである。このように考えると、メディアのテキストがリアルであるからこそ批判力があるとか、リアルであるから現状批判になるという見方は成り立たなくなる。そもそもこのようなリアリズムの考え方は「伝達モデル」、すなわち現実とは「構成」されるのではなく「再現」され、それはそのまま受け取られるものだというモデルを踏襲しているために起こることである。しかしドイツのテレビ/ポピュラー・カルチャー批判の多くはこのモデルに立脚しており、3章以下でも繰り返し問題にしている。

第3章は「タブロイド・テレビ」を扱っている。タブロイド・ジャーナリズムもまたつねに批判を受けてきた。だが、それにもかかわらずタブロイドはポピュラリティを得ている。ここではタブロイド・テレビのテキストをハード・ニュースとの比較から分析し、それがかつてのフォークロアと同じような「物語構造」を持っていることに着目した。正統なジャーナリズムの側から、タブロイドは文化の墮落的な形態と言われ、それが人々の感情を扇動することが批判される。だがタブロイドの「物語構造」から見れば、タブロイドはジャーナリズムよりも、ブロードサイドやベンケルザングのような民衆文化にその根を持っていると考えられる。すでに17世紀には殺人事件を報じるブロードサイドがあったとされ、その頃にはすでに商業的な民衆文化としてブロードサイドはあった。このように考えると、たとえば大衆社会と大量生産と「墮落した大衆」だけにタブロイドの説明を求める通説は、たしかにタブロイドの制度的、形態的な側面を捉えることはできるが、その文化の側面は説明できず、大衆の低俗な趣味という紋切り型の説明を繰り返してしまうことになる。文化としてタブロイドを考えることによって、そのポピュラリティの生成過程を見ることもでき、またこれまでのタブロイド批判の問題点を考える契機にもなる。たしかにタブロイドの物語構造は感情を動かすものである。しかしそれがつねに反動的で全体的な運動になるわけではない。もしなるとすれば、そこにはどのような力によって人々の感情と反動的な言説が結び付けられるのかを見るべきである。

第4章のテーマは「デイリー・トーク・ショー」である。トーク・ショーもまた低俗で非道徳的だとして批判される。それは一般の人々がテレビという公的な領域に「侵入」していると感じられているために起こっている反応でもある。しかし実際のトーク・ショーのテキストを分析すれば、そのテキストが矛盾をはらんだ、さまざまな声が錯綜する場としてあることが分かる。そして最近ではトーク・ショーを、これまで公共圏から閉め出されていた人たちが公共の場で発言できる場として注目する研究がある。それは女性であったり、またエスニック・マイノリティであったりするが、とくにセクシュアル・マイノリティの人たちが積極的にトーク・ショーを利用していることが報告されている。そこでは「一つの真実」が生み出されるのではなく、「それぞれの真実」がある。たしかにこのように政治的な部分を強調しすぎることは問題がある。トーク・ショーのテキストは下からの反動的な勢力になることもあるからである。しかしそれでもトーク・ショーにおける増殖する〈語り〉は、ミクロなポリティクスと見ることは可能であろう。

第5章は現代ドイツの多文化的状況を問題にしている。その多文化的状況とは、文化が並存している多元主義的なものではなく、雑ざり合って混沌とした状況のことである。この多文化的状況の問題を考えるために、前半ではドイツにおけるカルチュラル・スタディーズの現状を概観している。ドイツでは文化概念をめぐる状況が上述のようなものであったため、カルチュラル・スタディーズの受容が遅れた。しかし最近ではポップについての言説が「好景気」を迎えている。しかしこれにも問題があり、文化研究にある政治性は剥ぎ取られ、「ハイブリッド」や「クロスオーバー」といったことばで称賛されるだけになってしまった。この章は、このような現状のなかにいるマイノリティのポピュラー・カルチャー（ここではトルコ系の人たち）が提示する問題を考察している。エスニシティを押し出す戦略もある。だがそういった戦略を取らず、むしろ商業主義的でグローバルな文化にアイデンティティを求める若者もいる。さらにトルコ人女性たちが出演したトーク・ショーのテキストから、彼女たちはけっして単一のカテゴリーに押し込められる存在ではないことを明らかにした。彼女たちを一つのカテゴリーに押し込めることは、他者をカテゴライズしようとする欲望なのである。

最後にこのようなドイツの多文化的状況に面して、日本におけるドイツ文化研究の可能性を考えている。日本においてドイツ文化を考えるとときもまた上述の文化概念が発動している。もしこのような多文化的状況を真剣に受け取る とすれば、国民文化を演繹したり、また文化の本質的な差異を強調したりすることは難しくなるだろう。

最後の第6章は女性とポピュラー・カルチャーについての考察を行っている。フェミニズムとポピュラー・カルチャーの「女性のジャンル」（ソープ・オペラ、ロマンスなど）は問題含みの関係である。前半ではこれまでの女性のジャンルについての先行研究を概観している。最近の研究は、女性たちがポピュラー・カルチャーから快楽を得ることに、積極的な意味を与えている。後半ではドイツでベストセラーになった三冊の「女性小説」に描かれたヒロインたちに焦点を当てている。フェミニズムの批判では恋愛小説とそのロマンチック・ラブのイデオロギーによって女性が抑圧されているとするが、しかし女性小説の主人公たちからは新しい連帯の段階に来ていることが読み取れるのである。彼女たちの多くはヘテロセクシュアルでモノガミックな関係に縛られていない。女性小説の批判もまた「伝達モデル」を踏襲しているが、しかし認識しなければならないのは、ポピュラー・カルチャーのテキストから女性たちが意味を生み出すその行為の能動性なのである。

本論文は、ポピュラー・カルチャーの諸相の記述ではなく、さまざまな日常的現象が、とくに批判的言説によって《ポピュラー・カルチャー》とされる過程に注目したものである。本論文はメディア研究というよりも、文化研究として位置づけられるものと考ええる。

論文審査の結果の要旨

本稿の最大の意義は、ドイツにおいても、また日本の地域研究としてのドイツ文化研究においても、依然まだ極めて蓄積の浅い現代ドイツの「ポピュラー・カルチャー」に焦点をあて、この分野での研究・分析上の有効な論点を提示したことにある。

戦後ドイツのアカデミズムにはナチズムの克服の課題が重く課せられ、その結果ナチズムにおける民衆操作性への批判への強い傾斜が見られ、「日常文化」としてのポピュラー・カルチャーを扱うに時、同様に発達した資本主義体制下にある他の国々とは質の異なったドイツ特有の困難があった。本稿でもこの事情が十分に意識され、一方で個々の「ポピュラー・カルチャー」として現象するものの特質を手厚く記述すると同時に、それを批判する「言説」における前提を問題化するという手続きに多くを割くという極めて独自の方法をとることにより、従来とは異なった論点を形成することに成功している。

評価される事例を幾つか具体的に指摘すれば、例えば第2章「啓蒙の道具としてのテレビーリアリティの位相」では、ドイツのテレビというメディアの90年代以前と以降の歴史的変遷と幾つかの番組を取り上げ、テレビというメディアあるいはメディア研究を支配する社会的「リアリズム/リアリティ」という言説が問題化される。90年代以降の状況のなかで「共有された社会全体の現実」というデノテーションを失った「リアリティ」概念ではもはや従来の「リアリズムの要請」という啓蒙的レヴェルが無効化され、そこから番組への批判的言説が生じているが、むしろこれらの番組が視聴者の感情的な次元でのリアリティの感覚を支えていて、コノテーションレヴェルでのリアリズムの技法の有効性という可能性を残しているとされる。第5章「ドイツにおける多文化状況と文化の研究をめぐる」では、伝統的な文化概念への批判的視座が研究者の間に浸透しドイツ文化の「多文化状況」が評価されるようになってくる状況が記述される。しかしその他方でポップ・カルチャーやマス・カルチャーへの賞賛的言説が「ハイブリディティ」という概念の持つ本来の意味を脱政治化し、相変わらず統合された「文化」概念の中での「文化的多様性」という言説に回帰し、文化をそもそも「差異」として構成することによる生産性へと位置づけられない「多文化」の言説の問題が分析される。第6章ではポピュラー・カルチャーとしての「女性小説」が取り上げられ、フェミニズム批評における男権主義/性差別主義、ジェンダーを本質的に分類し固定化する見方に基づく言説の有効性が問われ、こうしたロマンスを夢中になって読む女性読者を「理解できない他者」としてしまっていることを批判し、これらのソープ・オペラやロマンスという女性のジャンルを、女性達がそこから能動的に意味を見いだしていく「文化」と見ていこうとする展望を示している。

このように本論考は現代ドイツのポピュラー・カルチャーを本格的に取り上げた数少ない研究であり、同時にドイツにおける「文化」言説を批判的に検討することによって論点を形成するという余り類例を見ない独創的な研究であり、構成上の難点など幾つか不備はあるものの言語文化研究の博士論文として十分の成果を上げているものと評価できる。